

芥川竜之介『西方の人』注解 (七)

R. Akutagawa's "SAIHO NO HITO" Explanatory Notes (VII)

吉田孝次郎  
中野恵海

続 西方の人

は出来ない。

1 再びこの人を見よ

(注)

クリストは「万人の鏡」である。「万人の鏡」と云ふ意味は万人のクリストに倣<sup>①</sup>へと云ふのではない。たつた一人<sup>ひとり</sup>のクリストの中に万人の彼等自身を発見するからである。わたしはわたし<sup>③</sup>のクリストを描き、雑誌の締め切日の迫つた為に<sup>なげう</sup>ペンを抛たなければならなかつた。<sup>④</sup>今は多少の閑<sup>ひま</sup>のある為にもう一度わたしのクリストを描き加へたいと思つてゐる。誰もわたしの書いたものなどに、——殊にクリストを描いたものなどに興味を感じるものはないであらう。しかしわたしは<sup>⑤</sup>四福音書の中にまざまざとわたしに呼びかけてゐるクリストの姿を感じてゐる。わたしのクリストを描き加へるもわたし自身にはやめること

①倣<sup>なら</sup>へ 「倣<sup>なら</sup>へ」であろう。模範として、手本としてそれに見ならうの意であり、のつとる、まねをするの意。

②彼等自身 自分の本体、正体、その本質的な姿。転じて、それは我等自身にとってこの人生で何が一番大切な、何を生きるべきかの問題を発見することにつながるであろう。

③わたしのクリスト 正篇・1「この人を見よ」では「わたしは唯わたしの感じた通りに『わたしのクリスト』を記すのである」とある。

④雑誌の締め切日 「西方の人」には、「昭和二・七・十」「続西方の人」には「昭和二年七月二十三日」の欄筆日時、記入があり、

「統西方の人」は遺稿として昭和二年九月「改造」に発表された。

⑤ 四福音書 「マタイ伝」「マコ伝」「ルカ伝」「ヨハネ伝」

⑥ まざまざと 生々と。はつきりと。

⑦ わたしに呼びかけてゐる わたしに問題を投げかけている。

(解)

クリストは「万人の鏡」である。「万人の鏡」という意味は、万人がクリスト〔を模範としてそれに見〕ならえというのではない。たった一人のクリストの中に〔実は〕万人自身〔の本体〕を発見するからである。わたしは〔この正篇で〕わたしの〔感じたとおりの〕クリストを描き、雑誌(改造)の締め切日の迫つたためにペンをやめねばならなかった。今は多少の閑がある為にもう一度「わたしの Kristus」を〔角度を変えて〕描き加えたいと思つている。誰もわたしの書いたものなどに、——ことに〔信者でもない門外たる私の〕クリストを描いたものなどに興味を感ずるものはないであらう。しかしわたしは新約聖書の中にはつきりと私に〔問題を投げかけ〕呼びかけているクリストの姿を感じている。〔ここに私は、自分の問題とする角度から〕わたしのクリストを描き加えるの〔を〕もわたし自身にはやめることはできない。〔必然的な理由があるからである〕

(要旨)

本章は、「改造」(昭和二年八月号)に発表した「西方の人」の統

篇をあえて書きつぐ所以について述べている。それは、雑誌の締め切りのために中絶させられた執筆も、今は、時間にゆとりができて可能になったこと、「まざまざとわたしに呼びかけているクリストの姿を感じている」ことを挙げて、外的内的の理由としている。クリストという「万人の鏡」が、文学者の生き方についての自分の切実な課題を痛いほど鮮かに映し出してやまない以上、読者の興味を度外視しても、「わたしのクリスト」を書き加えずにはいられないのである。

クリストを「鏡」というのは、彼の前に立つ人をそれぞれに、自身の生きる課題を映し示し、真の自分自身を発見させ、自覚めさせるからである。つまり、人がクリストに対することは、それぞれの真の生き方を問われることを意味するのである。したがって芥川によって描かれるクリストは、芥川の内面に重大な意味をもつてつながるものであり、その「わたしのクリスト」が芥川の内面を語るものであること無論である。しかし、こうしたところから自画像説が生まれるとしたら、それはいささか短絡の嫌いを免れないだろう。彼が天才文学者の理想としたクリストに自己を対照させることによつて、クリストの中に観ている「永遠に超えんとするもの」や「共産主義者」は彼自身の愉快乃至重大関心事であつたに違いないが、彼が現実にそれらを生きていると自認していたとするのは無理であらう。同じく遺稿にあるつぎの二つの文章にも注意したい。

——僕は(中略)意識している限り、みずから神としないものである。いやみずから大凡下の一人としているものである。(「或る旧友へ送る手記」の「付記」)

——芥川竜之介！ 芥川竜之介。お前の根をしっかりとおろせ。お前は風に吹かれている葦だ。空模様は何時変わるかも知れない。ただししっかり踏んばっている。それはお前自身のためだ。同時にお前の子供たちのためだ。うぬ惚れるな。同時に卑屈にもなるな。これからお前はやり直すのだ」〔「闇中問答」の最終部〕

いずれにせよ、「クリストは我々に天国に対する愉悅を呼び起こした第一人者だった」(正篇・18)と記す芥川が己れをクリストに擬しているとするのは如何なるものであろう。それよりも本書は、生存を続ける限り、現実の絆につながる限り、不可能であった芥川の文学者観の総決算を意味したもの、そして死によってのみあがなおうとした文学者魂の遺言書と考えられる。

なお、正篇ではクリストを、その事跡の順にしたがって描いていたが、続篇では、芥川の重要課題の視点から、その全体像に対している章が多くなっている。

## 2 彼の伝記作者

(解)

ヨハネはクリストの伝記作者中、最も彼自身に媚びている〔つまり自分を愛弟子扱まなでしあつかしている〕ものである。最も単純な原始的統一を保ち素朴な美しさに輝やいた「マタイ」や「マコ」に比べれば——いや、巧妙にクリストの一生を話してくれる「ルカ」に比べてさへ、近代に生まれた我々に〔近代人の感覚にマッチした〕人工の甘露味かんろうみを味

わざずにはおかない。その様な「ヨハネ」も〔他の福音書にない〕クリストの一生の意味深い事実を伝えている。我々は、「ヨハネ」の伝記に或苛いらだ立たしさを感ずるのであらう。けれども〔他の〕三人の伝記作者たちに〔は無い〕或魅力も感じられるであらう。〔現実の〕人生に失敗したクリストは独特の〔粉飾や〕色彩を加えない限り、容易に「神の子」になる事は出来ない。ヨハネはこの色彩を加えるのに少くとも当時における最新式アップトゥデートの手段をとっている。ヨハネの伝えるクリストはマコやマタイの伝えたクリストの様に天才的飛躍を具え〔た様に描かれ〕ていない。が、壮嚴にも優しいこと〔だけ〕は確かである。

クリストの一生を伝えるのに何よりも簡古かんこ(簡單で古色を帯びていること)を重んじたマコは恐らく彼の伝記作者中、最もクリスト〔の本質〕を知っていたであらう。マコの伝えたクリストは〔裝飾的なものが無いだけ返って現実主義リアリズム的に生き生きしている。我々はそこに〔マコ伝に於ては〕まるでクリストと握手したり、抱いたり——更に多少の誇張さえすればクリストの指ゆびの匂におひまで感じる〔思いがする〕であらう。しかし〔前述の〕壯嚴にもいたわり深いヨハネの〔描く〕クリストも斥しりぞけることは出来ない。〔魅力を具えている。〕兎に角彼等〔四福音書〕の伝えたクリストに比べれば、後代の伝え〔解釈〕したクリストは、——殊に彼クリストをデカダン〔だ〕とした或ロシア人のクリスト〔観〕像は徒らに彼〔真実の〕クリストを傷きずけるだけである。クリストは時代の社会的約束や習慣を躊躇ちゆうちよなく踏みにじった。〔具体的に言うると、売笑婦や税吏みせうりや癩病人をいつもクリストは話し相手にした〕しかし〔クリストは、これら社会から棄てられた者達ば

かりに注目して」天国を見なかつたのではない。クリストを、幼児〔風〕に描いた画家たちは自然にこの様なクリストに憐みに近いもの（心情）を感じていたのである。〔クリストは事実、母胎をはなれた後「唯我独尊」の大獅子吼をした仏陀よりもはるかに頼りないものである。〕けれども幼児だったクリストに対する彼等（画家たち）の憐みの方が多少にもせよ、デカダンと見たクリストに対する彼（ロシア人）の同情よりも勝っている（価値がある）。クリストは〔たとえ、カナの饗宴におけるが如く〕葡萄酒に酔つても、何か彼自身の中に在るものは（人々に）天国を見せずには措かなかつた。彼の（十字架上の）悲劇はその超えんとするもの」為に、——単にその為に起っている。〔前記の〕或ロシア人は或時のクリストが、どんなに神に近かつた〔か〕を知っていない。が、四人の伝記作者たちは、いづれも（誰も皆）この事実（即ちクリストの本質）に注目していた。

（要旨）

前章で「万人の鏡」という規定に芥川を導いたのは新約聖書の四福音書である。本章は、そのクリストの伝記作者四人のそれぞれの書きぶりについて感想をまとめ、それを後代のクリスト観と比較している。四人の伝記作者の語り口にそれぞれの特長を認めながら、ヨハネの記述の仕方にとくに注目し、他の三人はその引合いに出されている趣きがある。ヨハネは、四人の中で最も自分を甘やかし、いい子に仕立てていて、読む者をいらだたしくさせるけれども、他の三人にはな

い或る魅力が感じられる。人生に敗れたクリストを「神の子」にするために、マコやマタイはその天才的飛躍に力を入れて記しているのに対し、ヨハネは壮嚴といえるほどに優しくいたわり深いクリストを描き伝えている、とし、これこそ荒涼たる近代に最もふさわしい「神の子」の書き方であり、人工の甘露味だとする。そして躍動するマコのクリストにも劣らなからうとしている。こゝに芥川の人生派的文学観の一端がうかがわれる。

つぎに後代の伝えるクリスト像（デカダンの、幼児的）をとり上げ、それらの拠りどころにふれながら、いかなる場合にも天国を見せずにはおかなかつた、そして絶対者を信じ求めて生きたクリストの真実に注目していたのは上記四人の伝記作者であると結論する。

3 共産主義者

（解）

クリストはあらゆるクリスト達（聖霊の子達）のように共産主義的精神を持つている。「だから」若し共産主義者の目から見るとすれば、クリストの言葉は悉く共産主義的宣言に変わってしまうであろう。彼（クリスト）の前に出たパプテズマのヨハネさえ「二つの衣服を持つるものは（余分の一枚を）持たぬ者に分け与えよ」と叫んでいる。しかし、「だからと云つて」クリストは、「政治的イデオロギーの上での、あの最も革命的な」無政府主義者ではない。我々人間はキリストの前に「立たされれば」自然に〔俗悪な〕本体、「その本質的個

性」をはつきりさせられてしまう。(本篇・続1「再びこの人を見よ」の「万人鏡」参照)とは言っても、彼は我々「俗世間の」人間を操縦することは出来なかった——あるいは我々人間にあやつられることもなかった。それは、キリストが、ヨセフの子ではない、聖霊の子供だったせいである)しかしキリストの中にあつた共産主義者を論ずることは、「カトリック主義に反対し、カルヴィンがその改革を遂げたような、自由な」スキツルには遠い日本(全体主義的国であり、天皇制、君主国の日本)では少なくとも不便を伴っている。少なくとも(おまけに)「小心翼翼たる、日本の」クリ教徒たちのために「は」。

#### (要旨)

芥川は本章において、キリストとキリスト精神に生きる者をすべて共産主義者と断じ、かかる重大なる問題を論議する自由のない日本のお国柄とキリスト教徒のおめでたさとを擲擲している。真のキリスト者は例外なく共産主義的精神の持主だと、パプテズマのヨハネを引合いにして断定した後で、共産主義という無政府主義が連想されがちだが、神という絶対者を信じ求めて生きるキリストは、一切の権威を否定する破壊的な無政府主義ではないとし、その裏付けとして、我々人間は彼の前では自然と本体を丸見え(注、第1章のキリスト鏡説と表裏一体で、第1章で人間の側からの対キリスト関係を反対の立場におきかえた考え方)にしていることを記した後、もともと、キリストという共産主義者は、相対を超えた神に生きる聖霊の子であるから、人を操ることも人に操られることもないのだと注記する。そしてさら

に、キリストの中の共産主義について論議することは、ヨーロッパの共和国スイスから距離の上でも、政体の上でも遠く隔っている日本では困難を免れないし、それを別としても、キリスト本来の姿を見失っているキリスト教徒たちにとっては恐らく望めることではなからうと結んでいる。

#### 4 ① 無抵抗主義者

キリストは無抵抗主義だった。それは彼の同志さへ信用しなかつた為である。近代では丁度トルストイの他人の真実を疑つたやうに。——しかしキリストの無抵抗主義は何か更に柔かである。④静かに眠つてゐる雪のやうに冷かであつても柔かである。……

#### (注)

①無抵抗主義 nonresistance 悪に対するに暴力によらず無抵抗の愛を以てし、敵を人道的に感化させようとする主義。トルストイやガンジーがとなえた。

②同志さへ信用しなかつた 聖書の中ではペテロに「今夜鶏なかがさる前に爾三次われを知らずと言ん」(「マタイ伝・第二十六章・三十四)或はユダに「爾曹のうち一人われを売なり」(「マタイ伝・第二十六章・二十一)と言つたりしている、が、この弟子をさえ諦らめているイエスの心境には、詩的正義に燃えるあまりの現実無視の心

があり、悪に抵抗するのはすべて無駄であると観じているのだと芥川は主張するようである。

- ③トルストイの他人の…… ビルコフの「トルストイ伝」にトルストイが他人の誠意を信じなかったという記事があるが、このことなどに材をとった芥川の「山嶋」(大正・九・十二)の一節、トゥルゲネフが往時のトルストイの追想するところに「……それらの追憶のどれを見ても、我執の強いトルストイは徹頭徹尾他人の中に、真実を認めない人間だった。常に他人のする事には虚偽を感じる人間だった。これは他人のする事が、何も彼のする事と矛盾してゐる時のみではない。たとひ彼と同じやうに、放蕩をしてゐたものがあつても、彼は彼自身を恕すやうに他人を恕す事が出来なかつた。彼には他人が彼のやうに、夏の雲の美しさを感じてゐると云ふ事すら、すぐに信用は出来ないのである。彼がサンドを憎んだのも、やはり彼女の真実に疑を抱いたからだつた。一時彼がトゥルゲネフと、絶交するやうになつたのも、——いや、現に彼はトゥルゲネフが、山嶋を射落したと云ふ事にも、不相愛(あひあはらざる)を嗅ぎつけてゐる。」と書いてゐる。芥川はキリストの弟子に対する不信の態度にトルストイを例にもつては来たが、それが同じであると述べているのではない。トルストイのは疑いであつてキリストのは無視である。
- ④柔らか かががない、或は力みがないという態度。キリストのは相手にしないという事に徹している。

(解)

キリストは「前章で述べたが如く共産主義的精神を持つていたが」また無抵抗主義者だった。それは「詩的正義の方に一途に燃えたため」の現実無視からくる「同志(や弟子達)をさえ信用しない心のせいである。近代(の例)では、ちょうどトルストイが他人の真実を疑つたように。——しかしキリストの無抵抗主義は「トルストイより」何かさらに柔らかである。静かに眠つてゐるやうにひやかではあつても柔らかである。……

(要旨)

前章でキリストの中に「共産主義者」を考えさせられた芥川は、本章ではさらに「無抵抗主義者」を見出している。絶対者を志向するクリストは、相対的存在たる人間を——たとい同志であろうとも——信用しない。したがつて彼の詩的正義——それは愛でもあるのだが——は何人に対しても一方通行的に発揮され、そこに彼の無抵抗主義者たる所以があつた。こういうところ——他人の真実を疑つて無抵抗主義に生きた点——は近代ではトルストイを連想させられるが、大事なことは、クリストの無抵抗主義にはトルストイに比して何ともいえない柔らかなものが感じられることである。「静かに眠つてゐる雪」のやうに、その態度は人の言葉をはじめから念頭におかないところがひやかではあるが、静かに見守つて、他人の自由を干渉しないところが柔らかである。この柔らかい心、それは何というクリストの魅力であることか。と、芥川は感動してその余韻を「……」で現わして本

章を結ぶ。

この点で対照的なトルストイを引合いにしているのは柔らかいクリストを際立たせる意味からであろう。「他人の真実を疑った」頑固なトルストイについて芥川はすでに短篇「山嶋」（大正・九年十二月）において描いている。なお、本文中の二ヶ所にある、この「柔らかい」クリストは第21章にも繰り返されて、さらに同義語に近い「優し」いクリストが三ヶ所に見られるのは芥川の最後の心情を語るものでもあろう。

## 5 ① 生 活 者

② クリストは最速度の生活者である。仏陀は成道する為に何年かを雪山の中に暮らした。しかしクリストは洗礼を受けると、四十日の断食の後、忽ち古代のジャアナリストになった。彼はみづから燃え尽きようとする一本の蠟燭にそっくりである。彼の所業やジャアナリズムは即ちこの蠟燭の蠟涙だった。

(注)

① 生活者 人生の生活人という意味で、イエスをこう呼ぶところに、生活者として、この人生を烈しく、無駄なく生きるイエスを賛美する語気がある。そしてイエスを質的に見て人間扱いする姿勢が見られよう。

② 最速度の 最高速度のの意。

③ 蠟涙 蠟燭の蠟のたれたもの、ではあるがそれはろうそくの遺物であり、形見であり、その不滅の生命の断片であり、そのかけらである。そして、それは又燃えるいのちを持つ。

(解)

クリストは最高速度の生活者である。仏陀〔の方〕は悟りを成就する為に何年〔間〕かを雪山のうちに暮らした。しかしクリストは洗礼を受けると、四十日の断食〔修業〕の後、すぐに古代〔第一〕のジャアナリストになった。彼はみづから〔進んで〕燃え尽きようとする一本の蠟燭にそっくり〔の生き方をしたの〕である。〔この譬えを用いると〕彼の所業や、ジャアナリズムはすなわちこの蠟燭の〔不滅のいのちを宿す〕蠟涙だった〔と言える〕。

(要旨)

本章を「生活者」と題したのは、クリストを一箇の人間としてその生活態度の角度から観ることを意味したものであろうと筆者には考えられる。その場合の顕著な特徴は最高の速度をもって一生を貫いていて、短年月で古代の文筆活動家ジャアナリストとして大成するに至ったこと、そして自分の生き甲斐のためにわれとわが生命を燃焼しつくそうとしていたことである。永く語りつがれる彼の所業と不滅の生命を蓄えている彼の作品はこの生活態度が遺したものである。それはみづから燃えることで何度でも燃える力を蘇らせる蠟涙を遺す一本の

蠟燭ろうそくにそっくりである。

以上が筆者の考える本章の要旨であるが、芥川がクリストにおける文筆活動と作品を生命燃焼の結晶とし、そのもつ永遠性に感動している様が、「蠟涙」という表現の中にうかがわれる。

## 6 ① ジャアナリズム至上主義者

クリストの最も愛したのは目ざましい彼のジャアナリズムである、若し他のものを愛したとすれば、彼の大きい無花果③のかけに年④とつた予言者になつてゐたであらう、平和はその時にはクリストの上にも下つて来たのに相違ない。彼はもうその時には丁度古代の賢人のやうにあらゆる妥協のもとに微笑④してゐたであらう。しかし運命は幸か不幸か彼にかう云ふ安らかな晩年を与へてくれなかつた。それは受難の名を与へられてゐても、正に彼の悲劇⑤だつたであらう。けれどもクリストはこの悲劇の為に永久に若々しい顔をしてゐるのである。

(注)

① ジャアナリズムの至上主義者 大衆に訴へ大衆を動かしたその時事性に生きることを人生最高目的とした者。正篇・19 参照。

② 無花果 ユダヤの象徴的植物。正篇・8・25・28・34・続篇・18

・22 参照。

③ 年とつた予言者 現実人生に妥協し安穩な老後を送る俗人の意を含ませた表現であらう。

④ 運命 聖靈アセウの子として、「超えんとする者」たるの運命である。

⑤ 彼の悲劇 人間、クリストの悲劇の意がうかがえる。

⑥ 若々しい顔を…… 瑞瑞みずみずしい、生々いきいきとした活動を永久にしつづける。

(解)

クリストが「この人生で」最も愛したものは目ざましい彼の「大衆に對する働きかけ、即ち彼の」ジャアナリズムである。若し他のものを愛したとすれば、「多分」大きい無花果のかけに「平穩に」年とつた「俗物そのものやうな」予言者に「でも」なつていたであらう。「現世的」平和はその時にはクリストの「身の」上にも下つてきたのに相違ない。「そして」彼はもうその時にはちょうど古代の賢人「達」のように、「現実との安易な」あらゆる妥協のもと「での生活に」微笑してゐたであらう。しかし「クリスト」の運命は幸か不幸か、彼にこういふ安らかな晩年「の生活」を与えてくれなかつた。彼の晩年「その十字架」は受難の名を与えられて「は」いても、まさに「人間クリストにとつては」彼の悲劇だつたであらう。けれどもクリストはこの悲劇のために永久に「滅びない」瑞々しい活動をしつづけているのである。



(要旨)

前章で著作活動に自己の一切を燃焼しつくしたクリストを考えた芥川は、ここに彼をジャナリズム至上主義者と規定した上で、著作活動至上主義に生きたことの意味をつぎのように思う。他の生き方を選んだなら容易に望めたであろう安穏平和な生活を犠牲にする悲劇をもたらしたが、またその悲劇こそがクリストに永遠の新鮮さをもたらしているのだと、する。つまりクリストの永久の若々しさは、自己の実生活犠牲の文筆生活至上主義によってのみ得られたと観じるのである。こういう芥川の中に、現実生活をかえりみずにはいられない——守らんとする側面と、それを大きく凌ぐ文学至上主義——超えんとするもの——への傾情とが看取されよう。芥川の内における生活と文学との関係は「統一」の要旨に引用した「闇中間答」の場合、群小作家に甘んじ、生活の破綻から逃がれることに必死であるのが、注意される。